

朝堂院東第六堂の調査

—第136次

1 はじめに

藤原宮中枢部の構造を明らかにするための計画調査の第8回目で、対象は朝堂院東第六堂。日本古文化研究所（以下、古文化研）が、1937～38年にかけて部分的な発掘調査をおこなっており、桁行12間（14尺等間）・梁行4間（10尺等間）の東西棟総柱建物と報告している。

だが本書48頁以下で述べたように、奈良文化財研究所が近年おこなってきた東第一堂・東第二堂・東第三堂の再発掘調査では、いずれも古文化研の報告とは異なる成果を得ている。なかでも東第三堂は、梁行5間で造営を開始したものの、途中で梁行4間に計画変更した可能性が強まるなど、時期差にも留意した検討が求められるようになってきた。

想定される東第六堂とその周辺地域は、民有地が及ばないため、建物全体を調査できる条件が整っている。また東第六堂の東方には、南北棟の東第四堂が建つ。これまで東第一堂～東第三堂の調査では、北流する水路のため、朝堂基壇西縁部の様相を十分に調査できなかった。そこで、東第六堂の全体と東第四堂の西縁部南半を含む南北31m×東西67m余の調査区を設定した。

本年度の調査は2004年10月15日から12月24日にかけて実施し、調査区東半（南北31m、東西37.5m、面積約1163㎡）の上層遺構を中心に平面検出をおこなった。調査部全体の発掘計画の関係で調査を中断し、西半の平面検出や遺構の本格的精査などは2005年度に再開する予定である。調査途中のため、ここでは検出遺構の概要を簡単に報告したい。

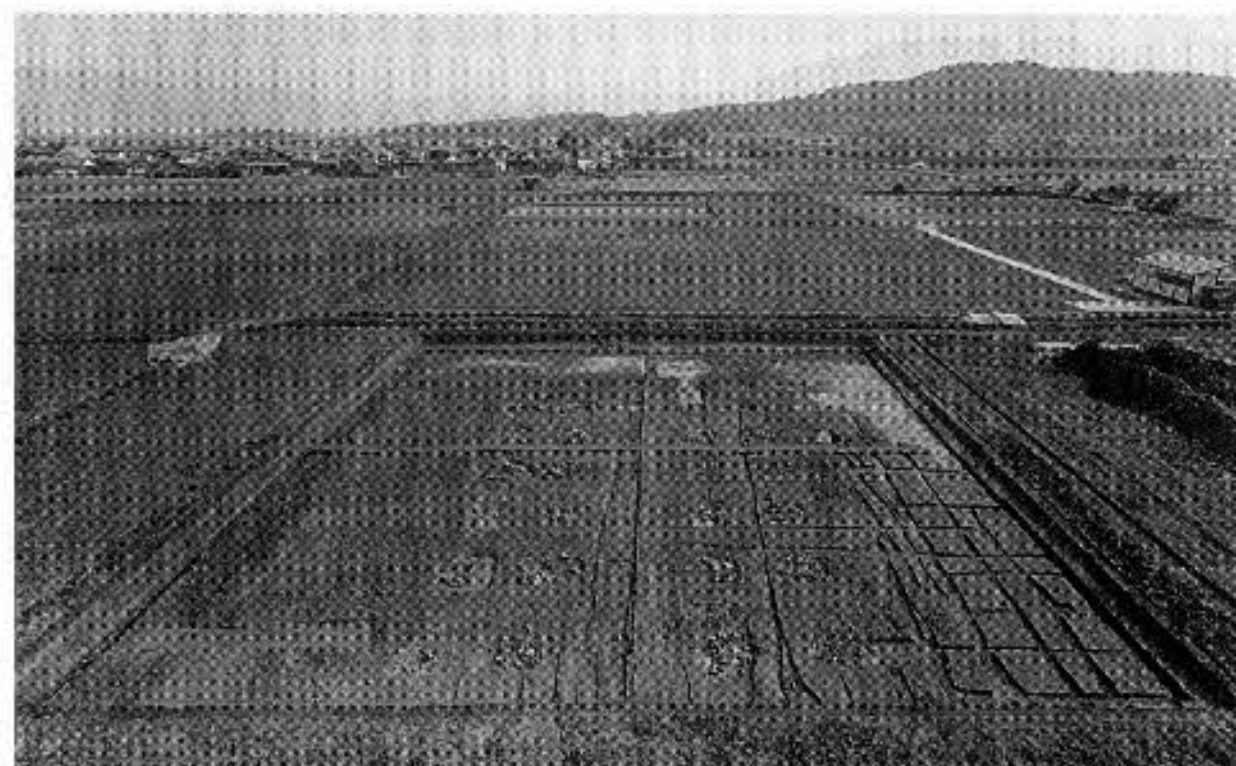


図79 古文化研調査区完掘後の状況（西から）

2 おもな検出遺構

遺構検出は床土直下でおこない、古文化研の調査区、中世以降の素掘小溝、平安頃の建物群・溝などを確認した（図79）。古文化研調査区の埋戻土を除去すると、根石・栗石が極めて良好な状態で姿を現し、東半の調査区内に35ヶ所の礎石位置を確認できる。南側柱筋の東から3つ目にあたる柱位置の南約3mの地点には、礎石1基が落とし込まれていた（図80）。礎石は花崗岩製で、長さ約100cm、幅約80cm、高さ約80cm。礎石据付掘形の検出には至っていないが、根石・栗石の位置から、柱間寸法は桁行が14尺等間、梁行は古文化研が想定した10尺等間ではなく、身舎が10尺×2、両廂各9尺になりそうである。棟通りにも根石・栗石は認められ、東第二堂・東第三堂と同じく、床張りの建物となる可能性が高い。

このほか、基壇外周部を掘り下げて、平城遷都時に廃棄された瓦の堆積（図81）や、朝庭部に敷かれたバラス敷きを広範囲で確認した。また、調査区南壁際に設けた土層観察を兼ねる排水溝を掘削した際、藤原宮造成整地土中で、藤原宮造営時に廃棄されたとみられる完形に近い瓦が多数出土した。今後、東第六堂の造営から解体にいたる遺構の検出が期待される。

一方、東第六堂の基壇部分では、径30cm前後の円形掘形をもつ小柱穴を多数検出した。平安頃に建物が頻繁に建て替えられたことがわかる。この頃まで残っていた基壇を利用して建物を建てたのであろう。東第一堂や東第三堂でも似た遺構を検出しており、当該期における土地利用の一端を示している。東第三堂の調査では、荘園の管理施設が置かれた可能性を指摘したが（本書59頁）、これらとの関係も追究すべき課題だろう。（市 大樹）



図80 礎石（北西から）



図81 瓦堆積（東から）